

産経新聞

平成29年(2017)日刊26781号

7/21 [金]

産経経済新聞(サンケイ)
THE SANKEI SHIMBUN
発行所 産経経済新聞東京本社2017
〒100-8077東京都千代田区大手町1-7-2
登録東京(03)3231-7111 (大代表)

中東の地政学と国際政治の構造は、ロシアとイラン優位のシリア和平プロセスに加えて、イラク政府軍によるイスラム国(IS)支配下のモスル奪還、サウジアラビアとカタールとの断交による湾岸協力会議(GCC)の機能不全によって、ますます複雑な様相を呈し始めている。

アルカイダとの共闘を模索しながらでも、モスル陥落でISの力が大きく弱られ、偽りのカリフ国家が終焉に近づいたことは間違いない。ISがさらにシリアのラツカを失うなら、「幻想の領土」をもつテロ国家はひとまず姿を消すであろう。

しかし、ISの犯罪活動は欧州、シナイ半島、アフリカでも続いている。注目すべきは、ISが出身母体であるアルカイダと対話もしくは交渉を始めたという点で、イラクと米英の情報も共通していることだ。単なる戦術レベルでの政治協力なのか、戦略レベルでの組織的な合同なのかは不明だ。はっきりしているのは、グローバル・ jihad を目指す組織の

「IS後」のイラクは再生するか

間て将来の戦略をめぐって論争や駆け引きが始まった事実である。ISとアルカイダとの大きな違いは、領土を獲得し直接に統治するか否かにある。アルカイダは、既存のムスリム独立国家の主権に庇護される形で活動してきた。1990年代初頭のトゥラビ―支配下のスーダンや、2001年までのアフガニスタンのタリバン統治、パキスタン北西部ワジリスタンでの部族地域で、各国の独立主権を、隠れみのりに使ってきたのだ。彼らは米中核同時テロのように「遠い敵」と戦ってきたのである。

しかし、アルカイダから派生したISは類似的とはいえず、領域はもとより経済的や軍や行政を備えた「国家」を曲がりなりに構築した。中東から欧州に至る地域の大きな構想要因になったのである。彼らは中東に蟻居し、体制を握る「近い敵」と戦つて自負してきた

正論



フジテレビ特任顧問
明治大学特任教授
山内 昌之

た。事実、スンニ派に属するISはイラクやシリアのシーア派はじめ、クルド人や非ムスリムのヤズイド教徒と対決してきた。

組織を根絶やしにするのは困難

モスル解放後のイラク政府は、ISがすくにも消え去る異常組織だという考えを崩さない。これは米欧にも共通した見方である。しかしこの見解は、政治リアリズムから見ればISの影響力の過小評価といつてもよい。そもそもISはわずかな数百人の部隊でモスルを

占領した事実を想起する必要がある。これは当時、シーア派主体のイラク政府軍に反発するかなり強固な地元的支持者がいたからだ。ISはその傲慢さと非人道的な残虐性のために、スンニ派アラブ支持者の難反を招いたが、イラクとシリアで過去の怨恨や宗派的憎悪が、ISを根絶やしにするのは難しい。最悪の見方は、モスルの解放を「シーア派の宗派的な勝利」として示す宣伝である。ポスト・モスルの政治課題は次の3つとなる。①宗教宗派や

多重的多層的に累積する対立

バグダードの中央政府は、破壊された中央部のスンニ派居住地の都市復興には熱心といえず、建設物資の搬入をしばしば阻止している。この「宗派間対立」に加えて、03年以来シーア派内部で進行する衝突や、ポストISのスンニ派アラブ政治運動をまとめる統一体の不在など、「宗派内対立」は深刻である。他にも複数のキリスト教徒宗派の存在は無視できない。矛盾はイラク国民を構成するはずのエスニック集団(民族)をめぐる関係でも生じている。「民族

間対立」の軸は、シーア派中心のバグダード政府とクルド人のKRGとの間にある。とくにKRGの版図の外にある産油地キルクークを占領中のクルド人兵力の扱いは紛争の大きな火種だ。

そこに住むトルクメン人の反クルド・親中央政府の機運は紛争の一要因である。さらに「民族内対立」も波乱含みだ。イラクのクルド人内部ではクルディスタン民主党(KDP)とクルディスタン愛国同盟(PUK)が長年、競合している。

また、シリアの大きな武装闘争組織やトルコのクルディスタン労働者党(PKK)との絡みがイラクの国民統合を複雑化させている。クルド系でありながら多神教徒のヤズイドは、KRGの庇護も受けられず、ISのモスル占領前後に女性の性奴隷化など筆舌に尽くしがたい経験を経た。

こうした対立が多重的多層的に累積しているイラクから解放して、すべ解決できない歴史の重みを国際世論に突きつけている。

(やまうち まさゆき)